

日本心理学会 第69回大会
ワークショップ19

進路意思決定における認知・感情過程

企画・司会:
梶見 孝(京都大学)

話題提供:
齋藤 貴浩(大学評価・学位授与機構): 高校生の進路意思決定の追跡調査
- 進学者の事前期待と満足 -
栗山 直子(東京工業大学): 類推を用いた意思決定過程と進路決定における役割
上市 秀雄(筑波大学): 高校生の進路決定における意思決定スタイルと後悔
若松 養亮(滋賀大学): 大学生の進路意思決定遅延研究から
下村 英雄(労働政策研究・研修機構): 進路意思決定過程における情報探索方略
とメタ認知

指定討論:
浦上 昌則(南山大学)

進行予定

個別発表は簡単な質疑と交代含め15分

- 1:30-1:40 梶見 孝(企画趣旨)
- 1:40-1:55 齋藤 貴浩(大学評価・学位授与機構)
- 1:55-2:10 栗山 直子(東京工業大学)
- 2:10-2:25 上市 秀雄(筑波大学)
- 2:25-2:40 若松 養亮(滋賀大学)
- 2:40-2:55 下村 英雄(労働政策研究・研修機構)
- 2:55-3:05 浦上 昌則(南山大学) 指定討論
- 3:05-3:10 参加者からの質問受付
- 3:10-3:20 話題提供者からの回答
- 3:20-3:30 全体討論とまとめ

WS概要

進路意思決定における認知・感情プロセスに焦点

共同研究「進路意思決定における認知・感情過程」(科研基盤B, 01- 04)
齋藤 高3から大学1年を対象とした継続的追跡研究に基づいて、事前の期待
と満足

栗山 類推を用いた意思決定過程とその進路決定における役割
上市 進路決定スタイルと進路決定後の後悔、その対処方略との関連

若松 大学生の意思決定遅延について、その要因となる決定の困難さ、そして
意思決定行動、個人差

下村 大学生の進路意思決定における情報探索過程とメタ認知に関して、とくに、
進路選択に対するレディネスの違いによる決定方略の違い、それを
支える進路選択課題に対するメタ認知の違い

指定討論 浦上 全体を統括する指定討論

共同研究「進路意思決定における認知・感情過程」

1. 研究目的

1. 進路の意思決定プロセスにおける認知メカニズム(意思決定や類推など)の解明
2. 満足や後悔などの感情要因の影響の解明
 - 人生における重要な選択である進路決定をテーマ
 - ・ 高校生、大学生が現実場面でおこなう意思決定の調査
 - ・ 意思決定においてどのような方略が用い、どのようなプロセスを経て決定にいたるのか、その後の行動も含めて、長期的にとらえ、その認知的、感情的な時系列的变化をとらえる
 - ・ 長期的目標: 類推を利用して満足を最大化し、後悔を最小化する進路決定支援システムとカリキュラムの指針作成

2. 研究の特色

- ・ 認知心理学、意思決定論、進路指導論の学際的な研究
- ・ 現実の進路決定場面の調査に認知心理学理論やモデルを適用
 - 現実の意思決定において重要な満足最大化と後悔最小化を重視
 - 人が、過去の決定経験をどのように現在直面している決定状況に利用するかという類推のメカニズムに注目
 - 現実の進路意思決定プロセスにおける感情と認知の統合的なメカニズムを解明
- ・ 進路決定に迷う人たちの決定支援をおこなうための基礎データやモデル化
 - 高校・大学などの進路指導に活用
- ・ 人生における長期的な意思決定プロセスを解明する手がかりが得る

3. 本研究の位置づけ

意思決定論

- 規範的理論やモデル(e.g., Edwards, 1961; Luce & Raiffa, 1957)は、人生における現実場面での意思決定とは異なるという指摘
- 実際の意思決定プロセスの記述や説明を目指す認知心理学な意思決定理論では、効用最大化だけではなく、ヒューリスティック(e.g., Gigerenzer, 2000)、満足化や後悔(e.g., Gilovich & Medvic, 1994)など、より感情的な要因の重要性に着目
- ・ 類推研究は思考領域において活発な研究領域(次の時間のWS 2.7)
 - 意思決定研究への応用(Holyoak & Thagard, 1995)
 - その実証研究はまだ少ない。
- ・ 現実の意思決定を対象として、感情要因と類推メカニズムを考慮に入れた統合的な意思決定モデルやその実証的研究は未開拓

3. 本研究の位置づけ(つづき)

進路指導

- 国内では進路指導の領域で、志望動機や進路意識などに基づく調査・研究(たとえば、淵上, 1984ab; 齊藤, 1996; 椎名ほか, 1997; 鈴木・柳井, 1993; 豊田ほか, 1991; 浦上, 1992ほか)がされ、主体的な意思決定力の育成が重視(文部省, 1992)。
- 生徒・学生が実際にどのような認知プロセスで意思決定をおこなうのか(下村, 1996)、あるいはどのような決定の困難さがあるのか(浦上, 2001; 若松, 2001)、どのような支援が可能なのか(e.g., 横山, 1997)に関する認知心理学的研究はまだ少ない

S 県立高校進路調査の概要

S 県立高校 首都圏の進学校

(1) 高校生の進路選択時の調査

調査対象 : 3年生約380名(男女半々)のべ約3000名,
調査時期 : 平成10-16年の毎年11月調査
平成17年は卒業時調査
調査方法 : 質問紙をLHRで配布回収

(2) 卒業後の追跡調査

調査対象 : 卒業生 毎年約170名 のべ1100名
調査時期 : 平成14年-17年の毎年8月調査
1回目 卒業後5ヶ月
2回目 卒業後1年5ヶ月, 2年5ヶ月, 3年5ヶ月
調査方法 : 郵送法

成果

栗山直子・上市秀雄・高藤貴浩・楠見 孝 2001 大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推 教育心理学研究, 49巻, 4号, 409-416
そのほかに日本教育心理学会大会発表(2000-2004)